

# カトリック センター便り

第5号  
平成25年  
2月7日

## 待降節↓降誕節↓年間へ

### 教会のごよみ

学生の皆様は学年末の試験も終わり、いよいよ長い春休みになりますね。そして四月から新しい年度が始まります。学校の暦は四月に始まって三月に終わり、一般の暦は一月に始まって一二月に終わります。ところが教会の一年は一二月のはじめ前後に始まります。



短大クリスマス静修会

教会は、キリストの神秘全体を一年周期で記念し、キリストの誕生日として祝うクリスマス、四つ前の日曜日が一年の初めの日となります。この日からクリスマスまでの前日までを待降節、クリスマス(主の降誕祭)当日から主の公現の祭日を経て主の洗礼の祝日(一月)中頃(まで)を降誕節と呼んでいます。イスラエルの民以外の人々にご自身を現わした公現の祭日を過ぎると、クリスマスツリーや馬小

### 今月のみことば

「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」(ヨハネ8・12)



学部クリスマス静修会

屋を片付けます。

この二つの季節のほかに、キリスト教の中心である復活節の前後にも四旬節と復活節という季節があります。その始めや終りは固定されておらず、年によって移動します。これらの季節以外の時を年間と呼んでいます。

### キャンドルサービスの意味は?

キリスト教の中心メッセージは、イエスを通じて示された「神の愛(アガペー)」の意味と働きについてであり、神から愛されている人間個々人に課されている使命は「私(神)があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい(ヨハネ13章34節)」に表されています。キャンドルサービスは、神から与えられた愛を、自分の周りの人々に伝えていくことが、すなわち、神を愛することになる、というアガペーの理想的な流れを象徴したものです。

## 学内探訪 名画をたずねて



図書館2階廊下の壁にかかっている

名画ならぬミケランジェロ(1475~1564)の名像である。ピエタとは悲哀を意味し、十字架から降ろされたイエス・キリストを腕に抱き、悲しみに暮れる聖母マリアを現わしている。若干二五歳(1498~1500)で一枚岩の大理石を使って完成した傑作である。現在、バチカンのサン・ピエトロ大聖堂を入れてすぐ右側に防弾ガラスに守られて置かれている。それは、過去二度にわたって心無い人から危害を加えられたからである。ミケランジェロ自身もほかに三体のピエタ像を手掛けているが、いずれも未完成である。他の多くの芸術家もピエタを彫り、描いているが、このピエタ像は、傑作中の傑作である。

### ピエタ ミケランジェロ

## カトリックと私 (3)

―なぜ、いま、自分はここにいるか―

学長 吉川 武彦

聖ペトロ幼稚園から聖マルチン幼稚園へ

幼児洗礼を受けていた第一子の娘は、私ども夫婦が内山神父さまによって結ばれた本郷教会に附属して設けられていた聖ペトロ幼稚園に通うことになった。わが家からは歩いて十数分だった。私は前記したように「月月火水木金」という。一週間まったく休みなしのフルタイムで千葉大学附属病院と群馬県の榛名病院の往復をしていたので、娘の通園に付き添うことはほとんどなかった。

しかしながらわが家ではこの娘が幼稚園でなにをしてきたかということはよく話題になり、娘の“あだ名”は聖ペトロ幼稚園の園児という意味から「ペト」ちゃんと名づけ、声掛けはもっぱら「おい、ペトちゃん」であった。第二子は年子で生まれたので、二人は団子のようになっていて一緒に遊び、幼稚園にもよく二人して通っていたようである。おおらかといえはおおらかで、幼稚園児でもないこの長男も幼稚園と一緒に保育して下さったりもした。

10月ともなるとどこでも次年度の入園児の申し込みが始まるが、聖ペトロ幼稚園でも募集をはじめたので長男もこの幼稚園にお願いしよ

うと入園を申し込んだ。「ペト」ちゃんが二人になるはずなので「ペトちゃんズ」と呼び始めた。そのようなときに私は教授からの命令で、群馬県の榛名病院から長野県の駒ヶ根病院に転勤を命じられたのである。榛名病院では副院長という役職をいただいていた関係から月給は手取りで27万円ほどであったが、長野県職員となると13万円ほどになった。もともとこの長野県から国立療養所に転じたときはそのまた半分ほどの7万円の月給になった。それが国立の研究所に転じたらば月給は5万円に下がった。

長野県立駒ヶ根病院の医長として転勤することになったのが1968年、昭和43年12月、もう病院の回りは雪で埋まっていた。与えられた公舎は病院のすぐ脇にある医師宿舎、小さいながら三間ある古い宿舎である。だがうっそうとして松林のなかにあるので薄暗かった。妊婦である家内をこの環境に連れてくることもできなかつたし、すでに述べたように第一子の娘はすでに本郷教会の附属幼稚園「聖ペトロ幼稚園」に通園中だったこともあり年度途中の転園はかわいそうだと思ひ、翌年3月までは単身赴任と決めていた。当分は単身赴任と決めていた理由はそれだけではない。第三子の次男はこの夏に生まれたばかりであり、それにすでに家内は第四子を妊娠していたからである。

第二子の長男もこの聖ペトロ幼稚園に入園することになっていたが、そのお断りをしての駒ヶ根赴任であった。こうして駒ヶ根で第四子、三男を得た。家内は父親の影響か野球が大好き、夏の甲子園大会は欠かさず見るといふ熱心さで

ある。第一子こそ4月生まれであったが第二子、第三子、第四子とも8月生まれ。まさに甲子園真つ最中が臨月であった。第四子を取り上げていただいた当時の名称でいう「昭和伊南病院」には4月以降検診に通うことになったが臨月のときも甲子園の結果を気にしていたし、日中はテレビにかじりついていた。

聖マルチン幼稚園にまつわる思い出

第三子、次男が駒ヶ根の病院宿舎で歩き出したときのことである。この子は8月2日生まれたのだが、その8月2日、1歳の誕生日のこと。それまで這いはいをするだけで立って歩くような気配はまったく見せなかったこの子がむつくり立ち上がり、すたすた歩き出し八畳間を横切り始めたのである。第四子を妊娠中であった家内もびつくり仰天、互いに目を見合わせ、ただただ笑うのみであった。

駒ヶ根の宿舎にはたくさん思い出がある。まだ子どもたちが駒ヶ根に移ってくる前、私はカトリックの幼稚園はないだろうかとご近所の方にお聞きすると駒ヶ根駅の近くに聖マルチン幼稚園があると教えていただいた。早速幼稚園に伺ってお願いしたところ、長女の転園と長男の入園を許していただくことができた。また、単身赴任のときとは違って家族を迎えることになるので病院当局にお願いしたところ駒ヶ根市の高台、梨の木にある公舎を貸していただくことになった。この家は病院のすぐ脇にある公舎とは違ってとても明るい家だった。大雨で崖崩れがあり家を潰された方々が集団で移住してこ



られた地域と言うこともあつてか、私たちもすぐに受け入れていただけた。

駒ヶ根駅からは歩くと15分以上はかかったがバスがごく近所まで来ていた。私も家からほど近いところにある停留所まで子どもを送り二人の子をバスに乗せると、バスの運転手さんにはこやかに子どもたちを受け取ってくださいるばかりでなく、マルチン幼稚園のところできちんと降ろして下さいました。そんなのかな時代であつた。

ある日、いつものように二人の子をバスに乗せてバイバイして20分ほどしたら、なんとマルチン幼稚園のご近所の方から「幼稚園は、今日はお休みなんです」のご連絡をいただきました。当然、幼稚園の先生方は出勤していませんが、おそらく門も閉まつていたので子どもたちはうろろろしていたので。そのご連絡に感謝しつつ「それでは家に帰るように言って下さい」とお願いした。子どもたちはもともと行きはバスだが帰りは歩いて帰って来ていたので、なれてはいるものとのんだドジをしたものだった。

ふだん、幼稚園からの帰りは徒歩。二人して一緒に帰ってくるのだがなかなか家に着かないときもある。そんなときは帰り道の途中に広がるれんげ田で寝っ転がったり草花を摘んだりしていたようである。遊び疲れて家に帰るときには草履袋は忘れてくるし、鞆を忘れてくることもあつた。そのよう



な「忘れ物」はときにはご近所の方がもつてきてくださったたり行き来する道端の木にぶら下げてくださったりした。

この聖マルチン幼稚園に、先日おじやました。もちろんのこと、当時の先生方はおられなかったが、事情を聞いてくださった先生が各教室を案内してくださった上にお茶までごちそうしてくださつた。私は二人の子どもたちがその後どのように成長したかを語り、それもこれもマルチン幼稚園での教えを受けたおかげだと感謝してお別れをした。幼稚園の門前にあつた樹は大きくなり見違えるほどであつたが、門内に入るアプローチは、相変わらず少し下り坂道になつていた。

応対してくださった先生方は、この幼稚園ももう神父さまもおいでになりませんし、シスターもおいでにならなくなつてしまいましたと語り、どのようにしてカトリック幼稚園としての伝統を繋げていけばいいのか、迷いに迷つていと話しをされた。清泉の卒業生も何人かおいでになるようだったが、お互いに名乗り合うことはなかった。でも、各教室に顔を出しては子どもたちと言葉を交わし、幼稚園を辞去するときには子どもたちから盛大な見送りを受けた。

皇太子殿下ご夫妻のご来臨など

駒ヶ根病院と近いところに知的障害者の入所施設である「県立西駒郷」があり、私はその嘱託医を務めていた。この施設に皇太子殿下ご夫妻が慰問において下さるといふことになり、

なんと「皇太子殿下ご夫妻が来県されるので精神科病院は患者を外に出さないように」という県からのおふれが出た。ご訪問になる県立西駒郷に最も近い病院は駒ヶ根病院なので、私も県職ではあるが事務職の方々は県の指示を遵守するようにと医局にも指示をしてきた。

なんとしてもそのことに納得できなかった私は、病棟の患者さんたちに「美智子妃殿下と皇太子さまがおいでになるが、みんなでお迎えに行かないか」と声掛けをしたら「美智子さまとお会いしたい」という患者さんたちが圧倒的だったので院長に掛け合うことにした。当時の石田院長は私の言葉に耳を傾けて下さつた。そこで「何かあつたら私が責任をとりますから、先生は目をつぶってくださいばいい」と申し上げるとかすかに頷いて、OKとなつた。

患者さんたちは大喜び。舗装していない道路にはやばやとむしろを広げて座り、両殿下をお迎えした。美智子さまはこやかに笑いながら私たちに手を振ってくださいました。皇太子殿下もここにこされながら通り過ぎて行かれた。もちろんこのお二人は、いまの天皇陛下と皇后さま。患者さんたちは帰り道、くちぐちに「美智子さん、きれいだったね」と話し、喜んでくれた。もちろん不祥事などは起こりようもなく、何ごともなく終わった。このようなことをはじめ、私にとつては楽しかった長野は南信の生活だったが、そのようななかでも私に嬉しい話しが舞い込んだ。

大学院修了のときに提出した学位論文「ローレルシャツハテスによる不安の研究」を精神科

領域では最も権威のある日本精神神経学会の機関誌である日本精神神経学会誌に投稿したが理解を得られず大幅な書き直しを命じられた。その指示には納得がいかないので悩んだ挙げ句、掲載依頼を取り下げた。このままでは大学院を留年しなければならなくなるので千葉大学医学部の紀要、千葉大学医学雑誌に投稿しなおし掲載許可を得たので大学院を修了することができた。

ごく一般的に言えば、大学の紀要に掲載した論文はあまり高い評価を得ない。それだけに私は「この論文は死んだ」との考え、ロールシヤツハ研究者として進む道を断られたと考えた。そこへロールシヤツハ研究の第一人者である片口先生からお手紙が来た。片口先生とは一度もお会いしたことがない。ブルーブラックの万年筆で書かれた流麗なお手紙だったが、そこにはこれだけの論文をなぜ「このような雑誌に発表したのか」というお叱りと、なんとこの世界では超一流の「東京ロールシヤツハ研究」という雑誌にこの論文を再掲させて欲しいというお申し出で書かれていた。

このような経過から私の学位論文は二つの雑誌に載ることになった。もちろん二重投稿ではない。片口先生のお手紙は一度はなくしてしまっただかと思っただが、なんと本学に転じてきた際に整理した書類の間に挟まっていた。いまま私の机のなかに大切に保存している。こうしてロールシヤツハ研究者として認めていただけた私のところにとんでもないお誘いがかかって来た。いまの国立精神・神経医療研究センター精

神保健研究所、当時の国立精神衛生研究所、略称「精研」へ来ないかというお誘いである。

いまま続く駒ヶ根とおつきあい

精研の部長である加藤正明先生からの伝言と言うことで目黒克己さんがお話をもつてこられた。加藤先生はのちにこの精研の第5代目所長になられたし、目黒先生はのちに厚生省の局長になられた方である。加藤先生とも一度もお会いしたことはなかったが、私が書いた自殺関係の論文の査読者でもあった関係から何度かお手紙のやりとりはあった。伝言してきた目黒先生、以後は目黒さんと呼ばせていただくが、目黒さんは「なんで加藤先生が君のことを知っているのかわからないが、何しろ君に声をかけてこい」と言うから来た」と言っていた。

あとになってわかったことだが、加藤先生は私の自殺関係の論文を読んでから、私が自殺以外に書いた論文などを読み、いまだ言う「精神障害者の地域生活支援」に関心があると判断してくださっていたようである。当時、加藤先生は精研に「社会復帰部」をつくって精神障害者の社会復帰研究として「デイケア研究」を始めておられた。このデイケア研究は1963年、昭和38年から始められたものだが、研究に行き詰まりが出てきた関係から、臨床のよくできる精神科医を捜していたということであった。目黒さんは臨床医ではあったが行政に関心が高く厚生省に引き抜かれることが決まっていたという。その後がまを捜していたと言うことらしかった。

この話がたちまちに進んだために、私は駒ヶ根病院から去ることになったが、家内は駒ヶ根住まいがよほど気に入ったのか「ひとりでも市川に行ったら」とまで言う始末。第四子を得てからはご近所の方々とおつきあひも深まり、お手伝いにまで来ていただけることになっていたからでもある。また最も親しくおつきあひさせていただいた方とは、いまでも行き来がある。いやそれどころか、転勤すると言うことがご近所に伝わると、また駒ヶ根に帰ってきて欲しいということから、この地主になれというご近所命令が出て、とうとう駒ヶ根に土地をもつことになってしまった。現在でも200有余坪の地主である。

「購入させられた」この土地には、私は「この土地です」といわれたときに見に行っただけで、その後はまったく行かなかった。農地だったので宅地に変更してから購入したのだが、この土地はかつてのご近所の方々がそれぞれ使ってくださっており、そこでできた作物が定期便のようにわが家に送られてくる。もう代が変わってまったく見ず知らずの方が「前に使っていた方からの申し送りです」という手紙付きでなすやキュウリ、南瓜やジャガイモ、薩摩芋やトウモロコシなどが来る。このようにまだまだ駒ヶ根とのご縁は続いている。

(2013年1月11日)